



Title	『指南玉音解義』研究
Author(s)	朴, 愛華
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 朴 愛 華 ）

論文題名

『指南玉音解義』研究

論文内容の要旨

本研究は、現存する最古の漢喃辞典とされる『指南玉音解義』（以下『指南』と略す）をチュノム資料として扱い、『指南』所収のチュノムの音韻論的分析に加えて、『指南』がベトナム音語韻史の研究にどのような寄与があるのかを検討するものである。

『指南』は15世紀初期から17世紀中期にかけてのベトナム語の研究における貴重な文献であるにもかかわらず、その主な先行研究はTrần Xuân Ngọc Lan（1985）とHoàng Thị Ngọc（2016）のみである。それらに示された結論によると、「音韻資料から見ると、『指南』の成立年代は、どれだけ早くても14世紀より前には遡らず、語彙の意味的特徴から見ると、遅く見積もっても17世紀である」（Trần Xuân Ngọc Lan 1985）とのことである。管見の限り、現時点ではそれ以上の情報は見当たらない。

また、ベトナム語音韻史に関する最近の研究動向から『指南』を俯瞰すると、従来の漢喃辞典としての意義に加え、『指南』の研究に新たな方向性を加える必要性があると考えられる。本研究はこのような研究の現状を踏まえて、清水（2015）の研究方法に従った分析を通じて、『指南』所収チュノムの示す音韻特徴が15世紀から17世紀中期にかけてのベトナム語音韻史の研究に大いに貢献すると指摘した。

本研究は全8章から成り、以下、各章の概要、研究の目的と結果を述べる。

第一章では、まず古代ベトナムにおける漢字使用の諸相にはどのような特徴があるのかという着想から、本研究での主資料である『指南』を取り上げた。そして、『指南』に関する主な先行研究を踏まえつつ、問題点と不十分な課題を指摘した。続いて、清水（2015）でのチュノム資料をベトナム語音韻史研究に利用する方法で、『指南』所収のチュノムがベトナム音韻史上、15～17世紀も引き続き起こった音韻変化現象である摩擦音化（spirantization; lenition）の過程を示していることを指摘することにより、本研究での新しい視点と目標を提示した。最後に、本研究の背景と論文全体の枠組みを示した。

第二章では、本研究の主要な研究対象である『指南』について、書誌学的観点から基本的な情報を整理した。まず、テキストの様相と構成内容を紹介し、従来の研究では扱われなかった見出し語の収録状況について集中的に論じた。そして、チュノム序文と漢文序文を日本語に翻訳し、「宁甲」（chữ kép；合字）と「宁単」（chữ đơn；単字）など、『指南』の言語学的価値を示唆する箇所についても言及した。結論として、『指南』では双音節構造を示すチュノム「宁甲」（chữ kép；合字）が「単字」に改められていることから、『指南』の時期には単音節化が完了していたと推定されるので、『指南』の編纂時期が早くとも15世紀以降である可能性を指摘した。

第三章では、『指南』の見出し語に付された音注箇所に注目し、『指南』では漢語の音をどのように注音したのか、またその音注がどのような音韻情報を示しているのかについて分析した。まず、被注音字と注音字の音韻対応

関係を4つの音注類型にまとめ、「付録3」に『指南』の全ての音注箇所を分類して示した。次に、従来のベトナム語から考察した研究とは異なり、漢語音韻学の観点から音注が示す音韻情報を分析した。その結果、漢語の「唇音の分化」と「清音と濁音の合併」及びベトナム漢字音特有の「唇音の舌歯音化」の音韻状況を反映していることを明らかにした。以上の研究を通じて、『指南』では漢語を中国語の原音ではなく、ベトナム漢字音で読んでいたことと、及び少数の漢語をチュノムで注音したことを指摘した。最後に、既存のチュノムの定義に固執すると、本章で提案した新たな知見を得るには限界があること、及び最近のベトナム音韻史の研究動向にも加え、本研究では清水（2022:71）で提案したチュノムの定義に従い、『指南』をチュノム資料と見做すことを再度強調した。

第四章では、『指南』所収チュノムの示す声母の音韻特徴が、どの時代の代表的な音韻体系と合致するかを考察した。Shimizu（2020）に基づき、チュノムの読音と表音部分の声母の音韻対応関係を「一般的対応」と「例外的対応」に分類し、唇音、歯音、舌音、喉音の順に考察を進めた。「一般的対応」を判断する時、さまざまなチュノムタイプの例数と、それらのチュノムが『指南』に出現する総数も重要な根拠とした。「例外的対応」に関しては、本資料には異なる時代に作成されたチュノムが混在することに起因すると仮定し、所収チュノムの音符が表す音韻特徴を、Ferlus（1982；1992）とNguyễn（1995）及び清水（2015）に照らして、どの時代の代表的な音韻体系と合致するかを見極めた。なお、早期漢越語（Early Sino-Vietnamese）との関連性に起因する可能性も想定し、その判断基準はFerlus（2007）、王力（1948）、Alves（2014）、Baxter & Sagart（2014）、『侗台語族概論』（梁敏、張均如1996）を参照した。結論として、『指南』所収チュノムの示す声母の「一般的対応」は、15世紀から続いていた中古音とベトナム漢字音の対応規則を反映し、「例外的対応」が反映する現象はそれぞれ「a. 摩擦音化」（Ferlus1982）、「b. 古漢越語」、「c. 字形の相似性」、「d. 類音性」、「e. 15-16世紀の*s->tの反映」、「f. 暱語」、「g. 17世紀中期以降の音韻層の痕跡」、「h. PV時期の*Cr/*Clの痕跡」、「i. 音符からの類推」の9種類にまとめられることを指摘した。

第五章では、まずNguyễn（1995）やFerlus（1997）に示されたProto Vieticの母音体系を基礎に、引き続き第四章での研究の手続きと分析方法を用いて、『指南』所収チュノムの示す韻母の音韻特徴を分析した。まず、単母音の表記状況において注目すべき点としては、止摂が固有語の半広母音eとoを表記する際に主な候補になっていたことであるが、これによりProto Vieticからベトナム語が分岐した後の段階に*-i>-εの変化過程が想定できる可能性を指摘した。次に、末子音と介母音が見つからない二重母音-ia、-ua、-uraの対応状況についての分析を通じて、-iaを含んだ語彙は全て止摂の支韻字を音符とするチュノムで表したが、それらは古漢越語であることを指摘した。-uaは遇摂を音符としたチュノムで表した例が最も多いが、それは漢語音韻史における中古初期の「虞模合流」（Ting1975）現象の傍証となることを指摘した。同様に、-uraも遇摂（魚、語、虞）を音符としたチュノムで表したの例が最も多いが、それは中古初期の魚韻の音韻特徴を反映すると指摘した。続いて、介母音/w/による複合母音の対応状況における注目すべき点は、-oeの表記に止摂の合口の字を音符とするチュノムが使われていることから、『指南』では止摂が半広母音の表記に際して主な候補になったことが、より一層明確になったということである。最後に、末子音に関する分析を通じて、止摂の漢字音-iがチュノム読音-âyに対応する例が多数みられることから、Proto Vieticからベトナム語が分岐する段階への変化として想定される*-i>-ajの過程を『指南』のチュノムが反映していること、また、17世紀以降も長いスパンで起こったと考えられる*-in/-it>-ən/-ətの変化が『指南』所収チュノムの造字段階以降に生じていたことを示した。

第六章では、『指南』所収チュノムの示す声調の対応状況を分析した。総じて、ngangとhuyền声調を有する音節

は、主に平声の漢字を音符とするチュノムで、またhỏiとngã声調を有する音節は、主に上声の漢字を音符とするチュノムで、そしてsắcとnặng声調を有する音節は、主に去声及び入声の漢字を音符とするチュノムで表される傾向があることが分かった。また、17世紀から20世紀のベトナム漢字音における声調体系を基に、各声調の例外的対応についても分析し、それがベトナム音韻史の研究に資する点についても論じた。その中で、清濁の平声の漢字を音符としてhuyền声調の音節を表す例外的対応は、ベトナム漢字音の声調体系の内部に生じた変化の研究に大きく資すると指摘した。また、『指南』でのhỏi声調とngã声調の表記が混同された例外的対応は、それらの間のレジスター交替現象が生じていた可能性を示唆する例とみなした。最後に、上声の漢字を音符とするチュノムでsắc声調を有する音節とnặng声調を有する音節を表したチュノムの例は、唐代末期の中国語に一般的に見られた全濁上声の去声への合流状況を反映していると指摘した。

第七章では、清水（2022:76）でのチュノム分類法に従った分析を通じて、『指南』所収チュノムの字形上の特徴を概観した。結論として、「会意」と「訓読字」に見られるチュノムは、本来の形声字であったチュノムの義符或いは音符が省略されたものが形である可能性を指摘した。また、「差異化符号」が付されているチュノムと「会音」のチュノムを示し、「个」が「差異化符号」であるか、それとも「会音」のチュノムの構成要素の一部であるかについては、それぞれのチュノムの中で「个」の役割を綿密に調査すべきであると指摘した。最後に、『指南』中の同一形態素を表している複数のチュノムを2種類に分けたが、その中で「会音」のチュノムとそれに対応する「仮借」のチュノムは、それらの音符が時代的差異を反映する可能性を主張した。

第八章では、本研究を総括すると同時に、得られた結果を踏まえて、本研究の意義をより明確にし、今後の展開について述べた。まず、全体的な結論として、『指南』（蔵書番号：AB372）所収チュノムの示す音韻特徴は15世紀から17世紀中期のベトナム語音韻史を再構築する研究に大いに資すると指摘した。次に、本研究での主張がベトナム語の音韻史研究に対して示唆する点と、ベトナム漢籍研究に対して示唆する点について述べた。最後に、本研究は『指南』所収チュノムの示す音韻特徴を検討する作業に重点を置いたので、残された課題も再度検討する必要がある問題があり、それらを3点にまとめて論じた。

本研究は、従来、漢喃辞典とされてきた『指南』をチュノム資料とみなしつつ、本資料が言語史の資料的な空白期間である15世紀から17世紀にかけての音韻状況を示す貴重な資料であることを示した。今後は、15～17世紀中期の代表的なチュノム資料との比較を行うことで、ベトナム語の音韻史研究の新たな方向性の可能性を指摘したい。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (朴 愛 華)			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教 授	清 水 政 明
	副 査	教 授	岸 田 文 隆
	副 査	准教授	鈴 木 慎 吾
	副 査	講 師	近 藤 美 佳
	副 査	講 師	鷺 澤 拓 也 (神田外語大学)

論文審査の結果の要旨

本論文は、現存する最古の漢語・チュノム辞典といわれる『指南玉音解義』（以下『指南』）にみられる全てのチュノムをベトナム語音韻史の観点から分析し、これまで指摘されなかった言語学的価値を見極めることを第一の目的とした。結論として、言語史の資料的空白部分である15世紀と17世紀の中間段階の音韻状況を示す貴重な資料であることを主張した。論文の構成は、第一章序論で研究の目的、方法、資料、並びに本稿の採用するベトナム語及び漢語の各時代の音韻体系が示された。第二章で『指南』の書誌学的情報、第三章で『指南』の見出し語に付された漢字の音注とその音韻的特徴が紹介され、第四章から第六章までそれぞれ初頭子音、韻、声調に関する考察、第七章で所収チュノムの字形の特徴、第八章で結論と今後の課題が示された。

第一章では、『指南』に関する先行研究を紹介した後、ベトナム語音韻史研究への利用可能性とその方法が示された。特に、『指南』が編纂時期を示す確実な書誌学的情報を欠くことから、従来の研究は、周縁的な事実（避諱文字の使用状況等）を総合的に考慮した結果『指南』の編纂時期の上限を15世紀、下限を18世紀と推定していることが示された。次いで、それを音韻史研究の資料として利用する方法が先行研究を参照しつつ示された。つまり、音節の構成要素である初頭子音、韻、声調の順に、従来の比較方法により再構成されたProto Vieticの音韻体系、現代諸方言の音韻体系、そして文献資料の分析から導き出された音韻変化のモデルに、個々のチュノムの読音、表音要素（声符）の漢字音、並びにその中古漢語の所属音類の関係を位置づけて分析する方法が示された。

第二章では、『指南』の内部構成、収録される見出し語の特徴、及び漢文とチュノム文による序文の内容が紹介された。特にベトナム語の序文に見られるchữ kép（合字）とchữ đơn（単字）の解釈により、前者がより古いチュノム資料にしばしば見られる双音節構造を示すチュノムの用法を示す可能性を指摘し、15世紀の資料（例えば漢文・チュノム文対訳『仏説大報父母恩重経』）に比較的多く見られ、それ以降はほとんど見られない双音節構造を示す「合字」が、『指南』では「単字」に改められていると解釈できること、つまり、その時代には単音節化が完了していたと推定されることから、資料の編纂時期が少なくとも15世紀より新しいという可能性が示された。

第三章では、見出し語の漢字に付された直音方式による音注の性質を分析し、それらが中国原音に拠るものではなく、ベトナム漢字音（場合によってはチュノム読音）に拠っているという新たな見解を示した上で、編纂当時の漢字音の特徴（例えば重紐A類字における唇音の歯音化）が反映されている重要な情報源であることが示された。

第四章以降が実質的な本論となるが、まず比較的研究蓄積のある初頭子音については、現代ベトナム語によるチュノム読音を出発点とし、その音符の漢字音を中古音の所属声母毎に整理し考察した。特に注目される現象は、現代ベトナム語の摩擦音初頭子音に対し、中古音並びにベトナム漢字音の閉鎖音が対応する例である。これはMichel Ferlus が1982年に提唱し、Mark Alvesが2024年により包括的なデータによりその存在を確認した摩擦音化（spirantization, lenition）の生じる前の段階の音韻状況を示す例と考えられる。しかし、摩擦音化の条件となる前音節を示す字（合字の第一要素）が『指南』にはほとんど見られないことから、『指南』編纂の段階では摩擦音化がすでに完了していた可能性が示された。唯一の例外である「風」を表す{𩇛个愈}(gió)の例は、Proto Vieticの段階で*k-ja:と再構成される双音節構造の痕跡を示す極めて重要な例であることが指摘された。

第五章の韻に関する考察においては、まずNguyễn Tài Cănが1995年に示したProto Vieticの母音体系を基礎に、初頭子音と同様、チュノムの字音を出発点として対応する声符の漢字音と中古音類を比較して考察した。現代ベトナム語の母音音素全てを漢字音の候補がカバーできるわけではないので、チュノム資料に基づく積極的な貢献はあまり望めな

いものの、チュノム読音e /ɛ/に対し、声符漢字音が止摂対応母音i /i/で一定数対応する事実が示された。他のチュノム資料にも頻出するnghe (ng̃h̃ 宜)「聞く」、mẹ (mĩ 美)「母」等の例を考えると、Proto Vieticからベトナム語が分岐した後の段階に*-i>-eの変化過程が想定できる可能性を指摘したところが重要である。末子音を含む閉音節に関しては、止摂の漢字音-iがチュノム読音-âyに対応する例が多数みられることから、Proto Vietic からベトナム語分岐段階への変化として想定される*-i>-ajの過程を『指南』のチュノムが反映していること、また、17世紀以降も長いスパンで起こったと考えられる*-in/-it>-ən/-ətの変化が『指南』所収チュノムの造字段階以降に生じていたことが確認された。

第六章声調に関しては、チュノム読音に見られる6種の声調並びに2種の促音節の声調について、声符のベトナム漢字音と中古音所属声調の対応を見た結果、ngang調は清・次清・清濁を声母とする平声、huyền調は濁と一部の清濁を声母とする平声、hỏi調は清・次清声母の上声、ngã調は濁・清濁声母の上声、sắc調は清・次清声母の去声、nặng調は濁・清濁声母の去声、促音節のsắc調は清・次清声母の入声、同nặng調は濁・清濁声母の入声に対応することが示された。これは、現代ベトナム漢字音と中古音の対応関係と一致していることから、チュノム読音の声調は声符の漢字音を忠実に反映していることが指摘された。また、17世紀のローマ字資料を分析した論考でも指摘された通り、チュノム字音と声符の漢字音の対応関係にもhỏi調とngã調のペアがみられ、それらの間のレジスター交替現象が生じていた可能性を示唆する例として指摘した。特に重要な現象として、清濁声母の平声字に対してhuyền調で対応する例が一定数を占めており、他の声調と同様平声に関しても、かつて清・次清/濁・清濁の対立がngang/huyềnの対立と一致していた可能性をうかがわせる重要な例であることが指摘された。

第七章はチュノムの字形に関する考察であり、第二章で紹介された序文の内容が示唆する通り、合字と考えられる例がほとんどないこと、唯一の例外が上述の「風」を表す字であることが指摘された。また、一見会意字・訓読字に見える類いの文字も、元来は形声・仮借字であった可能性が示唆され、『指南』所収チュノムにおいても、声符を含まない類いの字は例外的であることが示された。

第八章では、結論として、『指南』所収のチュノムの音韻的特徴が15世紀と17世紀の間の状況を示唆していること、また、チュノム字音と声符漢字音の対応関係が示す音韻的特徴が一律に同時代の音韻状況を示すのではなく異なる時代の特徴が混在することから、所収チュノムの音韻的重層性が指摘された。今後の課題としては、ベトナム漢字音とチュノム読音における中国南方方言の影響の有無、『指南』所収のチュノムの意味的側面の分析による、より正確なテキスト理解の必要性が指摘された。

審査委員会からは、研究背景、前提知識、用語の説明が不足している点が指摘された。ベトナム語音韻史という参照可能な文献が限られる分野であることを認識した上で、より丁寧な説明が求められる点が強く指摘された。特に大前提とする漢語中古音とProto Vieticの音韻体系について、より詳細な説明が求められた。書誌学的考察については、基本的な情報の誤解と不足、先行研究を過信している節がある点が指摘され、より綿密な文献調査が求められた。チュノムの分析方法については、独創的で綿密であるが、例外的な対応に関する説明が不足している箇所があるとの指摘があった。特に、15世紀のチュノムで例外的な対応を示した声符が『指南』の中では依然例外的ではあるものの、より多くの字で使用され続けている事実などは丁寧に説明すべきとの指摘があった。

以上のような問題を残すものの、本論文の学術的意義は極めて高い。ベトナム語音韻史研究において利用可能な文字資料の中でもチュノム文献が圧倒的な量を誇るにもかかわらず、膨大な背景知識を要するという扱い辛さから誰もが避けてきた節がある中、的確な方法で音韻史研究の資料として位置づけることに挑み続け、一定程度の成果を生み出した事実は審査員全員が認めるところであり、学位申請者に博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であると判断した。